

大賞

一人ひとりの「いちばん」

荒川区立汐入東小学校 六年

八木橋 奈菜

柳田邦男先生、こんにちは。私は、「わたしのいちばんあの子の「ばん」という本を読んで、「いちばん」という存在について、考えてみました。

「『一』ってかっこいいよね」という文が絵本の中にありました。私は、本当にそうなのかなと思いました。柳田先生は、「一」はかっこいいと思いますか。

運動会や何かの大会などで戦うことで、「いちばん」という存在は生まれると思います。戦うものには、「いちばん」というものがないと決着がつきません。しかし、だからといって、「『いちばん』

がえらい」。決してそういうことではないと思います。

去年の運動会の徒競走は、いつもより順位が下でした。もちろん、「一位がいいな」とは思っていました。しかし、自分の中で一生懸命頑張ったのなら、それはそれでいいと思い始めました。また、その徒競走の最終レースで男子の一番速い人が走っていました。ある一人は、これまでの運動会の徒競走で全て一位をとっていました。しかし、その子は少しの差で一位に負けてしまい、泣いていました。私はそのとき、「負けて悔しかっただろうけど、一生懸命やった結果なのだから、それはすごいことだ」と思いました。

この本は、クラスの中にいるいつも一等賞やいちばんをとっている人と、いつも後ろの方にいる

人で、「いちばん」に対する考えが入り混じっています。いつも後ろの方にいる人は、「わたしの『いちばん』は、一等賞より『好き』なもの」とらえています。私は、「いちばん」とは、本気で頑張っ
てこそ、生まれる順位だと思います。楽にやっ
て一位より、頑張っ
てやって最下位の方が、私は
素晴らしいことだと思います。柳田先生は、自分
にとつての「いちばん」というものを見つけたこ
とがありますか。

私はこの絵本に出会って人それぞれの「いちば
ん」があるのだなと思いました。クラスで三十七
個の「いちばん」。その「いちばん」は、どれも素
晴らしいものなはずです。

私は以前、「悔しくて泣くくらいだったら、前も
ってできることはやっておく。」と言われたことが

ありました。「いちばん」になるということでもこ
れは通用します。しかし、「いちばん」になれなく
て泣くというのは、次につなげることもできると
思います。だから、「いちばん」になるまで、悔し
くて泣くということは大切なことでもあると思
います。

「いちばん」という存在は、競争をすることに
よって生まれることが多いです。しかし、だから
といって、勝ち負けが全てではないと私は思いま
す。自分の中の「いちばん」になれば「いちばん」。
先生もこの絵本を読んで、自分の中の「いちばん」
を見つけてみてください。